

私はこう 考える

「共感」って
何だろう？

絵を通じた共感体験

泉谷淑夫

絵描きの常で、私も物心がついたころから絵を描くのが好きで、とにかく絵を描いていると時間がたつのを忘れてしまうようなところがあった。

そんな子どもも中学校に進み受験期を迎えるようになると、絵を好きなことが相対化されて、得意なことではあっても将来の進路としては意識されないようになっていく。高校に進み、初めて油絵を描くようになるが、自分の描きたい世界というものはまだ見えていなかった。また、それまで美術の教科書などで、幾つかの好きな絵とは出会っていたものの、それほど強い印象を受けると

いうこともなかった。

一枚の絵との出会い

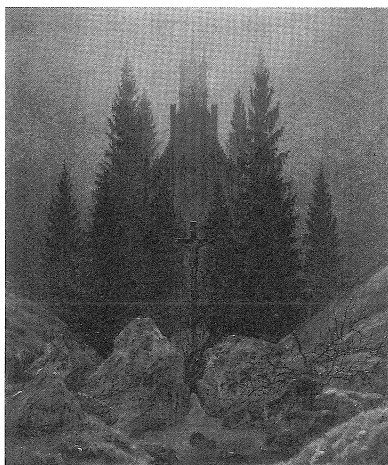
ところが、高校二年の時の教科書に小さく載っていた一枚の風景画に、私は強烈な出会いを感じることとなる。手前の岩と十字架、中景の樅もみの木と奥の教会が、シンメトリーの構図にまとめられている緊張感みなぎる不思議な絵であった。この絵を見たとき、私は自分が求めていた絵の世界を悟ったのである。正確にいえば、白黒の小さな図版を通して、私はこの絵の作者の表現意図と方

法にいたく共感したのである。何か見てはいけな
いものを見てしまったような感覚と、早く自分も
このような世界を描いてみたいという思いが私の
中で交錯していた。

この時私が出会ってしまった絵は、ドイツ・ロ
マン派のフリードリヒという画家の『山の中の十
字架』である。この作家の絵が教科書に載ること
は今でもほとんどないし、日本でのまとまった展
覧会も一九七八年の一度きりなので、名前も作品
もあまり知られていない。そうなると、より愛着
が増すものである。

フリードリヒの絵の特色は、強いメッセージ性
をもち、見る者の想像力を強く刺激することであ
る。そのようなたぐいの絵を私はそれまで見たこ
とがなかったので、なおさら強烈な出会いを感じ
たのだろう。と同時に、思春期と受験勉強の狭間はざま
でもがきながらも少しずつ育まれていた不安定な
自意識が、この絵を触媒として一挙に解き放たれ

たということなのかもしれない。人は最初から自
分の考え方や生き方に自信をもっているわけでは
ない。共感できるものと出会うことによって、自
分を発見し自信のかけらが芽生えるのではないだ
ろうか。



▲フリードリヒ『山の中の十字架』
「ドイツ・ロマン派の時代展 ナザレ派・
フリードリヒ・ベックリン」
(1990年東京都庭園美術館にて開催)
図録(毎日新聞社)P40より引用

芸術世界の「表現連鎖」

この経験を改めて考えてみると、フリードリヒの絵と私の内面世界の状況が「啐啄同時^{ちうたく}」的に遭遇したことに気付く。高二という不安定ながらも、自意識の発露を強く求めていた時代でなければ、フリードリヒの絵の世界にこれほど共感するということもなかったかもしれない。それまでも絵はずっと私を支え続けてきたわけであるが、具体的に表現したい世界が見つからなければ、生涯絵を描き続けていく必然性はなくなる。しかし今も人生の中心に絵を据え続けているということは、いかに最初の共感体験が大きかったかということである。また、それほどまでに芸術は他者の人生に影響を与えるものなのである。

実は、芸術の世界には時空を超えた影響関係がしばしば見受けられる。例えば、かのゴッホは独学で絵を学んだが、生涯ミレーを慕い、ミレーを

「北極星」として、自分の進むべき道を歩んでいた。このように作家と作家が作品を通してつながる系譜は、まさに芸術世界における「表現連鎖」と呼ぶにふさわしいものであり、「芸術が芸術を生む」という壮大なドラマの根底に、表現の内容や方法に対する深い共感があることは間違いない。だからこそ私は大学時代に、自分が素直に共感できる画家たちを探し、その系譜を作ることに夢中になった。その作業は必然的に美術史を踏破する学習となり、結果としてより多くの作品と出会い、共感の幅を広げるという意味で、後に美術教育に携わる際の大きな「財産」ともなったのである。

鑑賞における共感

その美術教育の中で私は鑑賞教育を大変重視しているが、鑑賞教育の場合も「共感」は重要なキーワードである。なぜなら私が鑑賞への導入で大事にしているものが「好き嫌い」の感覚で、これ

は鑑賞者を作品に対して正直にさせるという意味で、やがて作品への共感を体験させるためのステップなのである。

子どもから大人になるにつれて、人は正直な気持ちを抱くの中にしまい込むようになる。そうしているうちに自分を見失ってしまうこともある。しかし、優れた芸術には「自己を発見させる」力がある。世間の評価で絵を見るのではなく、自分に正直に絵と対峙していくうちに、自分というものが見えてくるのが鑑賞の醍醐味である。芸術は誰にでも開かれているのではなく、心を開いた者に對して開かれるのであり、その時に共感という素晴らしい感覚を味わうことができるのではないだろうか。

名画と幼児の組み合わせ

以上の話が幼児教育とどのようにかかわるのかは、専門家ではない私にはよくわからない。ただ

一ついえることは、自我の芽生える幼児期にも共感体験は可能なはずである。何よりも幼児は好奇心旺盛で正直である。だからこそいろいろなものに反応するし、夢中にもなる。すでに一部には幼児に名画鑑賞を試み、幼児たちの優れた直観力を引き出している興味深い例もある。

とかく私たちは教育においても制度的な発想に陥りがちである。例えば「絵本は子どものもの」と思い込んで、大人が絵本を楽しむことを忘れてしまうように、名画の場合は逆に「名画は大人のもの」と思い込んで、幼児にはまだ早いとしまい込まないでほしいものである。

「名画と幼児」という意外な組み合わせには、きつと予想外の展開が待ち構えているような気がする。

(岡山大学)